


 書評

春木繁一 著

腎移植をめぐる兄弟姉妹

精神科医が語る生体腎移植の家族

野間俊一

わが国で初めて腎臓の移植が試みられてから半世紀が経過した。今や臓器移植は決して特殊な先端医療ではなく、誰に対しても開かれた一般医療になりつつある。ただし、1997 年に脳死を人の死と認める臓器移植法が策定されてからも、やはり生体間移植が圧倒的に優勢である日本の移植事情の中で、移植患者とその家族が少なからぬ心理的葛藤を抱えているという事態は本質的には変わらない。やはり、健康な身体にメスを入れるということの不自然さは、関係する人たちの心を波立たせずにはおれない。

著者は、腎移植の歴史とともに移植患者に寄り添い続けた、わが国の「臓器移植精神医学 organ transplant psychiatry」のパイオニアである。あとを追って、若干の意欲ある医学者がこの領域で活躍しているが、およそ 40 年間にもわたってひたすら移植医療に携わってきた精神科医は著者をおいてほかにない。本書は、移植医療者向け雑誌『今日の移植』への連載記事を中心に、近年発表された論文を 1 冊の本にまとめたものである。平易なエッセイ風の筆致の背後に、経験に裏打ちされた著者の強い信念が見え隠れし、内容はきわめて重く深い。

前半は、本書の題名にもなっているように、臓器移植をめぐる「同胞葛藤」がテーマである。これまであまり指摘されてこなかったが、生体間移植で最も問題が生じやすいのは、親子間でも夫婦間でもなく、同胞間での臓器提供なのである。それは二者関係の問題ではなく、「親が介在してくる」三者関係のためだと著者は説く。そして多くの症例を呈示しながら、同胞がドナーとなることに潜在する周囲からの圧力、負い目からの解放欲求、ヒロイズム、長子を重んじる儒教的倫理観、報酬への期待感など、さまざまな力動がうごめいているさまを、一つひとつ明らかにしていく。特に、既婚の兄からの臓器提

供をめぐる家族全員があれこれと腐心した、20 代独身女性症例についての 78 ページにわたる描写は圧巻である。改めて移植医療の難しさを考えさせられる。

本書の後半では、腎移植に携わる精神科医がぜひ認識しておくべきさまざまな精神医学的問題が取り上げられている。特に、移植そのものが成功しているにもかかわらず生じるうつ状態を指す著者のオリジナル概念である「逆説的抑うつ」、レシピエントとドナーが同じ苦痛を訴える「シャム双生児効果」、移植成功後も拒絶反応への恐怖から人生を楽しむことができない「ダモクレス症候群」、ドナーの過剰な思い入れから生じる「産み直し幻想」など、一般の精神科医にはなじみの薄い臓器移植特有の諸概念が具体例とともに解説される。再透析問題、「軽い意識障害」判別の重要性、さらには免疫抑制剤の副作用といったきわめて実際的な内容にも触れられている。

最終章で、著者の精神療法的スタンスがまとめて紹介されている。否認を暴かないことの重要性の指摘などは、自らも透析患者として生きる著者ならではの洞察であろう。本書は、臓器移植患者の心理を扱った希少な啓蒙書である。しかし本書の魅力は、身体疾患に苦しむ人々に対して精神科医のとるべき「応対」（著者は、小手先の技術である「対応」と区別する）、あるべき援助の姿勢についての知恵が散りばめられていることにあるのではないだろうか。移植関係者はもちろん、あらゆる医療者に一読をお勧めしたい。

(京都大学)

●A5 302 頁 2008 定価 2,625 円(本体 2,500 円+税) 日本医学館